

人喰い狂女

凶暴な女戦士の人質となった美女達は、
激しい凌辱の末に食肉として貪り喰われる



作者 大黒達也

人喰い狂女

作者 大黒達也

『あらすじ』

巨額の現金と、極上の美女を強奪する凶悪な銀行強盗団のメンバーであった女戦士のアリサは、警察からの追及を逃れ、人質とともに北海道の山中に潜伏する。バイセクシャルであるアリサは、若くて美しい女達を人質として樹海の奥深くにある別荘を不法占拠し、人質達をありとあらゆる方法で凌辱し、最後には食材として調理して貪り食らう。

一方、アリサを追って警視庁の工藤真弓が新人婦警の桜井由香とともにアリサ追跡の旅に出る。

『人肉強盗団』の番外編

『登場人物』

アリサ

謎の銀行強盗団の女戦士、残虐な性格と美貌の
持ち主

工藤 くどう
真弓 まゆみ

警視庁公安部外事一課警視。警視庁一の美しい
容貌肢体を持ち、テロリストを単身で殲滅させる
凄腕の持ち主

桜井 さくらい
由香 ゆか

警視庁公安部公安課警部補。スタイルが良く顔立ちも目鼻立ちがくつきりとした美人。コンピュータを使った情報収集能力に長けている。

白石 しらいし
美由紀 みゆき

警視庁航空隊所属役職は警部、ヘリの操縦にか
けては警視庁内で並ぶものがない。

その他アリサの性交奴隷となる女達

アリサによって拉致され、激しい凌辱の後に、
食肉として調理され貪り食われる若くて美しい女

達。

『目次』

プロローグ

第一章 追跡者

第二章 人食いの館

第三章 地獄のハーレム

第四章 人肉の宴

第五章 追跡

エピローグ

『本編』

プロローグ

深い森に刻まれた林道は、終わりが無いかのよう
に何処までも続いていた。

既に何時間も歩き続けていた。アリサは先を行
く三人の女達を眺めていた。

皆、アリサの獲物だった。三人とも後ろ手を縛
られ腰紐を打たれていた。アリサが腰紐の先端を
握っていた。三人とも美しい容姿を持っていた。

ジーンズを履いた足が長くきれいに伸びており腰
の位置が驚くほど高い。



警察と自衛隊によるアジト襲撃から半日が経過

していた。

アジトを逃れる際に、警視庁公安部の美由紀と他に二人の人質を攫ってきたのは正解だった。美由紀以外の二人の若い女達は、林道を散策していた旅行者であった。

アリサの所持品は、ハンティングナイフに自動小銃と拳銃一丁それに、リュックに納められた捕虜を拘束する際に使用する特殊ベルトのみであった。この特殊ベルトは、ベルト部分と爆薬部でできており、捕虜の首に装着するものであった。捕虜が抵抗を示したり、逃亡した場合に遠隔で爆発させることができる究極の拘束装置であった。調整と装着に多少手間がかかるので、落ち着いたら使用しようと考えていた。

食料は気にすることは無かった。前に行く女達の尻を見ながら、誰から先に食らってやろうかと考えていた。腹の中では、美由紀を最初に食らうことになるだろうと思った。

美由紀は公安部の刑事だ。アリサにとっては宿敵であり、最も危険な存在だった。食らう前には、十分鬨るつもりだ。人質は食料として連れてきた周囲は山菜の宝庫であったが、アリサには山菜やキノコ等の知識は皆無だった。

アリサと拉致された女達は、それから二時間ほども周囲を深い原生林に囲まれた林道を歩いていった。その間、一度も走行する車両には出会わな

った。

林道はいつしか、幅五メートル深さ三十センチほどで水底には清流のみに見られるバイガモが繁殖する川沿いの道となっていた。大きなカーブを曲がったところで前方にランドクルーザが停まっていた。車内を覗いてみたが蛻の空であった。キーも見当たらなかった。

アリサは三人の女達を近くにあった鬼グルミの大木の根元に縛り付けた。

「大人しくしてないと、撃ち殺すからね」

アリサは自動小銃の安全装置を外し、女達を脅してから、清流沿いの林道を、足音を忍ばせるように歩いた。

少し進むと若い女の笑い声が聞こえてきた。茂みの中から声のする方を確認した。二人の若い男が膝まで清流に浸かり、ルアーフィッシングに興じていた。二十代前半に見える女は鼻筋が通り、美しい大きな瞳を持っていた。身長も百七十センチ近くはあった。足が長く腰の位置が驚くほどに高かった。アリサの瞳が輝き出した。好物の部類であった。

男の方は身長百八十センチ以上あり、筋肉質で引き締まった体軀をしていた。二人は肩を寄せ合うようにして、水面を漂う釣り糸を目で追っていた。

「釣れるかい？」

アリサは自動小銃を肩に載せ、二人の背後から声をかけた。ふたりは驚いたように振り返った。ふたりの視線はアリサが持つ自動小銃に釘付けとなった。

「これかい？こいつは玩具じゃないよ」

アリサは銃口を二人の方に向けた。

「何をするんだ！」

男が女を背後に庇うようにして、アリサを睨みつけた。

「マッチョなお兄さん。彼女の前でカッコつけるんじゃないよ。こいつは本物だって言っているだろ」

軽快な連射音が鳴り響き、二人の周りにニメー

トルくらいの高さがある水柱を上げた。

「曜子。逃げろ！」

男は絶叫しながら、アリサに向かって両手を大きく広げて襲いかかった。再び銃声が鳴り響き、男の膝から血煙が上がった。男は前のめりに倒れ伏した。曜子と呼ばれた女は、逃げようとせず、腰を抜かしたようで、水底に尻を付けて震えるばかりであった。

アリサは、ゆっくりとした動作で清流に踏み込み、川面で起き上がろうとしている男の顔を蹴り上げた。見事にヒットし、男は低い呻き声を上げて意識を失った。男の襟首を片手で持ち上げ、軽々とした感じで岸边に運んだ。白樺の幹に男をもた

れさせた。男のジャケットを探り、車のキーを奪った。今度は清流で泣き喚いている女に向かった。「あんた。凄い美人だね。名前は曜子っていうんだらう？」

アリサは淫らな笑みを浮かべながら、泣き喚く曜子を上から見下ろした。

曜子はただ泣くばかりで、アリサを決して見ようとはしなかった。アリサは舌を鳴らして曜子の腕を掴み立ち上がらせた。意識を失った男がいる場所に連れて行き、おもむろに曜子のジャケットを両手で引き裂いた。曜子は驚きの表情を浮かべ、嫌々をした。アリサは鼻歌を歌いながらブラジャーを片手で筆り取った。美しくたわわに実った乳

房が零れ落ちた。

「なんて綺麗なオツパイなんだ！」

アリサは曜子の乳房を口に含み激しい勢いで吸った。曜子の泣き声がさらに高くなった。アリサはもどかしげな手付きで曜子の胴長とジーンズを脱がせ、パンティを筆り取った。洋ナシのように丸みを帯び、シミひとつない美尻が露となった。地面に四つん這いの姿勢を取らせ、背後から尻の割れ目を覗き込んだ。

アリサの冷たい舌が曜子のアヌスや膣周辺を舐

「ケツもきれいなピンク色しているよ」



め上げた。曜子にはこれまで同性愛の経験は無く、屈辱で心が張り裂けそうになっていた。狂人のような女が現れるまで恋人の圭吾と楽しいひと時を過ごしていたのだ。銃で撃たれた圭吾のことが心配であった。

「圭吾、助けて……」

曜子は蚊の鳴くような声で、白樺の根元で意識を失っている男の名を呼んだ。

「こいつ、圭吾っていうんだ。なかなか男前だね。

チ*ポもでかいんだろう？」

アリスが盛り上がった白い尻の割れ目から顔を上げ、猥らかな笑みを浮かべた。

「お願いします。助けて下さい。圭吾を病院に連れ

て行って下さい」

曜子はアリサに、膣やアヌスを指先で弄られながら、必死の思いで懇願した。

「そんなに恋人のことが心配なのかい？自分のことも心配した方がいいんじゃない。お前はもうアタイの家畜なんだよ。この柔らかくて美味しそうな肉をどう料理してやろうかね」

アリサは、再び尻の割れ目に顔を押し付けて、アヌスや膣を舐め始めた。暫くそれを続けた。女の身体を知り抜いたアリサの凄まじいまでの舌技に、曜子は快感を覚え始めていた。アリサの舌が動くたびに曜子の白い肉体がビクンと跳ねた。乳首を指先で刺激されながら、尻の割れ目を激しい

勢いで舐られ、屈辱や恐怖も薄れかけていた。男には絶対に真似ができない性技と言えた。

アリサがアヌスを舐めながら、膣に指先を入れた。膣壁を擦られる感触に眩暈を感じた。曜子は泣いていた。それは悔し涙では無かった。あまりに巧みな愛撫のため、曜子はアリサに征服されかけていた。曜子はアリサの顔に美尻を擦りつけながら、アクメに達した。

今度、アリサは曜子をマングリ返しにして、膣を激しい勢いで舐め始めた。

「曜子……」

圭吾が意識を戻した。大量の出血のために意識が朦朧とっていた。

「気がついたかい？」

アリサが、曜子の股間から愛液に塗れた顔を上げた。全裸の曜子は何度も逝かされたようで、茫然とした表情で雲ひとつない青空を見ていた。

「お願いだ。曜子だけは助けてくれ」

「まったく、お前達の熱々モードにはついていけないよ」

アリサは立ち上がり、腰のベルトからシグザウエルP二二六を引き抜いた。圭吾の前に立って、両腕を撃ち抜いた。圭吾は重たい呻き声を上げた。両腕を撃ち抜かれた激痛で、顔面には滝のように冷汗が滴り落ちていた。

アリサは圭吾の胴長とジーンズを脱がせ、パン

ツを尻から引き抜いた。萎びた男根を摘み上げ、口に含んだ。圭吾の顔を見上げながら、口腔性交を始めた。

激痛に全身を震わせていた圭吾の男根が、勃起し始めた。すぐに黒々とした男根が天を突いた。

アリサはジーンズとパンティを脱いで、その上に跨った。圭吾の顔を舐めまわしながら、激しい勢いで腰を動かした。圭吾は数分と持たなかった。アリサの膣内にすべてを放出した。

アリサは圭吾から離れ、曜子を立ち上がらせ、圭吾の前に連れて行った。

「冥途の土産に、匂いを嗅がせてやるよ」

アリサは曜子を背後から両足を開かせた状態で

抱え上げ、圭吾の顔に股間を押し付け鼻と口を塞いだ。渾身の力を込めて曜子の股間を圭吾の顔に押し付けた。

「止めて。お願い……」

曜子が美しい顔を歪め泣き叫んだ。呼吸困難のために圭吾の全身が震え始めた。

「どうだい？恋人のマ*コの匂いは？」

アリサが曜子を地面に横たえ、片足に固定していたハンティングナイフを引き抜き、圭吾の髪を掴み、首筋に押し当てた。

「早く殺せ」

「殺される奴は無様に命乞いをするものさ」

「そんなことをしても、お前は殺すだろう」

圭吾は、どこまでも好き通った瞳で曜子の顔を見詰めた。曜子は地面に腹這いとなり、見詰め返した。アリサが残忍な笑みを浮かべ、ナイフを持つ手に力を込めた。

「嫌！」

次の瞬間、曜子の絶叫が樹海に響き渡った。

アリサが失神した全裸の曜子を肩に担ぎ、ランドクルーザが止めてあった場所に戻った。

「その女性をどうしたの？」

鬼クルミの根元に縛り付けられた美由紀が、アリサを睨みつけた。

「こいつかい？ どうだい。最高の雌豚だろう。今

晩のオカズにしようと思っただけ」

「殺したの？」

「ちゃんと生きていますよ。今、殺しちゃったら、生きが下がるだろう。肉は新鮮なのが一番なんだよ」

アリスは曜子の尻に頬ずりをしてから、上を向いて勝ち誇ったように大きな笑い声を上げた。

それから一時間ほど、アリスが運転するランドクルーザーは林道を走り続けた。いつしか林道は白樺林の間を走っていた。少し進むと、白樺林が途絶え、百メートルほどの距離に建坪百坪ほどもある洋風造りの民家が見えた。人の気配は感じられ

なかった。こんな場所に立っている白亜の豪邸など金持ちの別荘ぐらいしか、思いつかなかった。無人ならば格好の隠れ家になる。アリサはひとり笑みを浮かべた。ランドクルーザを民家の駐車場に滑り込ませた。

周囲を白樺林に囲まれた家の周りには、テニスコートや水が抜かれた屋外プールがあった。

「済みません。何方かいらっしゃいませんか？」

アリサが玄関前で、ブザーを押しながらドアを叩いた。いくら呼んでも返事は無かった。手馴れた手つきで鍵を抉じ開け、女達と内部に侵入した。

普通の家なら居間ほどの広さがある吹き抜けの玄関ホールには、大窓から陽光が差し込んでいた。

床は総大理石張りで、いかにも金持ちの別荘と言った感じだった。

玄関ホールと続きになっている広さ六十畳ほどの居間には、白いシートがかけられたソファセットや大型液晶テレビが置かれていた。

アリサは玄関脇の納戸で見つけたロープで、曜子以外の女達を居間の柱に縛り付け、屋敷内の探索に出かけた。曜子はランドクルーザの荷台で意識を失ったまま倒れていた。後ろ手を紐で拘束してあるので逃げ出す心配は無かった。

まず、居間の隣にある広さ四十畳ほどのダイニングルームに入った。

中央にはイタリア製の高級ダイニングテーブル

が置かれていた。座り心地のよい椅子が十席並べられていた。

隣接する二十畳ぐらいの厨房には、広大な調理台が中央に鎮座していた。それはマグロを解体することが可能なほど、大きかった。アリサは大理石で造られた調理台の上を手でなぞりながら、猥らな笑みを浮かべていた。これだけの大きさがあれば女達の肉体を楽々と捌くことができた。深鍋や大型のフライパンも好都合であった。調理台の下は棚になっており、開き戸を開けると、刺身包丁や肉切り包丁が納められていた。アリサは刺身包丁を目の前にかざした。研ぎ澄まされた鋭い切っ先を見て思わず、身震いした。女達の尻や太腿

に突き刺す感触が思い起こされた。命乞いをして泣き喚く美由紀をこの包丁で捌く光景が脳裏を過った。

食器棚には外国製の高級食器が整然と納められていた。アメリカ製の大型冷蔵庫は電源が入ったままで数十本の缶ビールが冷やされ、冷蔵庫には牛肉や生ハムや魚介類を冷凍したものなどが詰まっていた。アリサは、それらには、あまり興味を持たなかった。肉類は女達の肉体から得ようと思っていた。長年、人肉を食べ続けたアリサは一種の依存症になっていたのだ。食品棚には米や小麦粉が納められていた。冷凍庫や食品棚の食料は家畜である女達に与えようと思った。

厨房の隣は大型冷凍室になっていた。ドアを開けると冷気が噴き出してきた。中には何も保存されていなかったが、捌いた後の女達を保存するには好都合だった。首や手足を切断し、天井から吊るしておけばよかった。

アリスは空っぽの冷凍室内を見詰めながら、猥らな笑みを浮かべていた。

バスルームは一階の裏庭に面していた。浴室は広さ三〇畳ほどもあり、浴槽は大人五人がゆったりと入れるほどの広さがあった。

ここは女達を前処理する場所としては最適だった。捌く前に腸内洗浄をする必要があるからだ。

これだけの広さがあれば、十分であった。極上の女達を四つん這いにして並べ、アヌスに温水を注入していく。考えただけで身震いした。

一階には他に見るべきものは無かった。アリサは一旦居間に戻り、女達の様子を確認してから、玄関ホールに行き、地下室へ続く階段を降りた。

地下には、四部屋あり、一室はワインの貯蔵庫となっていた。高級ワインが千本以上も納められていた。これでアルコールの心配をすることは無かった。

二番目の部屋は地下に設けられたラウンジで、カウンターが設けられ、その奥の壁には棚が作ら

れ、高級ブランデーやウイスキーが並べられていた。何もかにも隠れ家としてはお誂えの場所であった。

三番目の部屋にも鍵が掛けられていた。それも数秒で外してしまった。

部屋に入り、照明のスイッチを入れた。アリサは思わず、笑みを浮かべていた。そこは、拷問道具が並ぶ、地下のSMルームであった。持ち主の趣向が理解できた。壁一面には、様々なタイプの鞭や拘束具や極太の張形が並べられていた。

中央には産婦人科で使う分娩台も置かれていた。小型冷蔵庫の中には、浣腸液が詰まった小瓶がい

くつも納められていた。これで女達を存分に責め抜くことができるだろう。アリサは思わずジーンズの隙間から股間に手を入れ、クリトリスを触っていた。

最後の部屋には、ドアに鍵がかけられていた。アリサは小道具を使い手馴れた手付きで、鍵を解除した。中は十畳ほどの広さがあった。壁の一面はすべてが棚となっており、段ボール箱が整然と納められていた。箱の中身はアルバムといった他愛の無いものであった。ページを捲ると、二〇歳くらいの女が写っていた。その美貌にアリサは暫しの間、魅入っていた。写真には撮影年月日が印

刷されており、去年の夏に撮影されたものだった。
この家の住人であれば、いつか戻ってくる可能性があった。アリサは女を是が非でも自分のものにしたくなった。

他の箱も同様の中身であり、貴重品の類は無かった。アリサは不審な顔で、室内を見回した。足もとに視線を向けた。部屋に不似合いの高級絨毯が敷かれていた。アリサは屈みこんで、絨毯を捲り上げた。思ったとおり、絨毯の下には、戸板が設けられていた。取つてを引くと簡単に開いた。中を覗き込むと、同じくらいの高さがある部屋になっていた。梯子を降り、部屋に入った。壁に設けられていた開き戸を開けると、数十丁もの散弾

銃やライフル銃が納められていた。

驚いたことに銃刀法により、所有が不可能な拳銃も多数保存されていた。パイソン三五七マグナム二・五インチモデルやシグザウエルなどの高性能な拳銃も含まれていた。

この家の主は、普通の民間人には思えなかった。たぶん、暴力団関係者であろう。アリサにとり、暴力団など何の脅威に思えなかった。やってきたら、銃で撃ち殺すだけだ。

多数の銃器と大量の銃弾を前にして、アリサは安堵の気持になった。これだけ武器があれば、簡単に殺られることはないだろう。アリサはパイソン三五七をベルトに差し込み、その部屋を後にし

た。

次にアリサは二階に向かった。二階には五部屋あり、どの部屋も二十畳以上の広さがあった。その中でも四十畳以上はある主寝室と思われる部屋のドアを開けた。その部屋はリビングとベッドルームそれにバスルームがついていた。

リビングには、外国製の高級ソファセットが中央に配置され、部屋の隅にはバーカウンタが設けられていた。奥の棚には高級ブランディやウイスキーのボトルが並べられていた。

リビングに隣り合わせの二十畳ほどの寝室には、中央に広大な広さがあるダブルベッドが鎮座して

いた。

寝室には広さが十畳ほどもあるクロークが隣接していた。中には、若い女が着るブランド物の衣服が、納められていた。アリサはその中から、真紅のパーティドレスを取り出した。それを身体の前側にあて、鏡の前でポーズをとった。

「いいね。ここを寝室に決めたよ」

アリサは独り言を言いながら、着ている衣服を脱いで全裸になった。均整がとれた美しい裸身が露になった。乳房や尻にも十分な張りがあつた。

絹製のシートが敷かれたベッドに大の字になった。ひんやりとした絹の感触が全身を包み込むよ
うで、たまらなかつた。自然と股間に手が伸びて

いく。目を閉じて、己が膾やクリトリスを指先でなぞった。最高の気分であった。暫くの間、この家に隠れ住むことに決めた。

ベッドから起き上がり、ベッドサイドにあるテーブルの引き出しを開けた。中にはペニスバンド納められていた。アリサは極太の張形部分を握りしめ満面に笑みを浮かべた。それを腰に装着してクロークから取り出した真紅のパーティードレスを身に着けた。

屋外に出て、ランドクルーザの荷台から、意識が戻らない曜子を運び出し、一階にある厨房に運んだ。大理石の調理台に曜子を縛りつけた。

居間に戻ると、まず、美由紀の縛めを解いた。

後ろ手にした手錠はそのままにした。

「こんなことをして無事で済むと思うの？」

美由紀がすぐ近くで、自分の顔を舐めるように

見詰めるアリサを睨みつけた。

「アタイは、捕まったら確実に死刑なのさ。だから思いっきり楽しみたいんだよ」

アリサは衣服の上から、美由紀の乳房を鷲掴みにした。

「獣！」

美由紀はアリサの顔に唾を吹きかけた。

「威勢がいいのも今のうちだよ。すぐにひいひい言わせてやるから」

アリサは美由紀の唾を手の甲で拭い、それを舐めた。

「私のことはともかく、彼女達を開放しなさい！」

「わかってない女だな。お前は奴隷なんだよ。口の聞き方に気をつけるんだね」

アリサは、ジーンズの上から、美由紀の股間を強く抓った。

「……」

美由紀は美しい顔に苦悶の表情を浮かべた。

「お前達、名前は何と云うんだい？」

柱に縛り付けた女達に聞いた。

「……」

女達は、アリサに名を聞かれても蒼白な表情で

震えているだけだった。アリスは美由紀の股間を
抓りながら、空いている方の手で回転式拳銃のパ
イソンを女達に向けて、激鉄をカチリと鳴らした。
「美奈です」

長身でモデルのようにスタイルが良く、知的で
美しい顔立ちをした女が、俯きながら答えた。肩
先が震えているのが見えた。

「香織です」

身長は百六十センチぐらいで、豊かな乳房を持
ち、円らかな瞳の女が、蚊の鳴くような声で答えた。

「そうだよ。素直が一番さ。長生の秘訣だよ。お
利口なお前達に最高のものを見せてあげるよ。女
が女にレイプされるのを見たことないだろう？」

アリサは、猥らな視線を美由紀の顔に向けた。

美由紀にウイंकを送りながら、柔道の足払いをかけた。後ろ手を手錠で拘束されている美由紀は為すすべがなく、床に仰向けの状態で倒れた。

大理石の床に頭部を強打し、一瞬意識を失った。

一瞬後、意識は戻り自分の腹に馬乗りになっているアリサの姿を認めた。アリサは両手で美由紀が着ていたTシャツの襟首を掴み、一気に引き裂いた。

美由紀は黒色のブラジャーを身に付けていた。

「結構、淫乱な感じだね？」

アリサは、満面に淫らな笑みを浮かべ、生唾を飲み込みながらブラジャーを片手で筆り取った。

大きすぎず、形の良い極上の乳房が剥き出しにされた。

「嫌！」

美由紀は絶叫し、アリサを振り落とそうともがいた。

「静かにおし！」

アリサが美由紀の鳩尾を拳で強打した。美由紀は苦痛のあまり、息ができなくなった。そうこうしている間にジーンズを脱がされ、パンティも筆り取られた。一糸もまとわぬ全裸にされた。剥きだしにされた股間が寒々としていた。

極上の裸身を抑えつけられ、最初に乳房を激しい勢いで舐られた。敏感な乳首を舌先で弾かれ、

思わず喘ぎ声を洩らした。

「そんなにいいのかい？もっともっと良くしてあげるよ。お前をアタイの女にしてあげる」

「いやよ！変態！」

美由紀は同性により辱めを受ける屈辱に身悶えした。アリサはお構いなく極上の乳房を激しく吸い続けた。美由紀の下半身に手を這わせ、膣やアヌスを触りまくった。乳房の次は、股間に顔を入れ、クリトリスと膣を交互に舐り始めた。美由紀はあまりの快感に我を忘れそうになった。アリサの愛撫は屈辱を忘れかけるほどに巧みであった。アリサは美由紀の尻を両手で押さえながら、激しい勢いで股間を舐めまくった。美由紀は快感に吞

まれぬように、歯を食いしばる様にして耐えていた。不意にアリサが指先をアヌスに忍び込ませてきた。クリトリスとアヌスを同時に責められ、脳内がスパークした。快感の絶頂に昇りつめようとしたところ、アリサがアヌスから指先を抜き、股間から顔を離した。

「そんなに簡単には逝かせてあげないよ」

アリサは、茫然とした表情で天井を見上げる美由紀の裸身を舐めるような目つきで見詰めた。再び、美由紀の股間に顔を入れた。美由紀はアリサの生暖かい舌を股間に感じた。それだけで逝きそうになった。尻を手で押さえられ、舌で膣口からクリトリスにかけて、なぞられた。アリサの生暖

かい舌が、クリトリスをなぞるだけで気が遠くなりかけた。次第に嫌悪感が薄れ、代わりに堪え切れないほどの欲情が、湧き上がってきた。

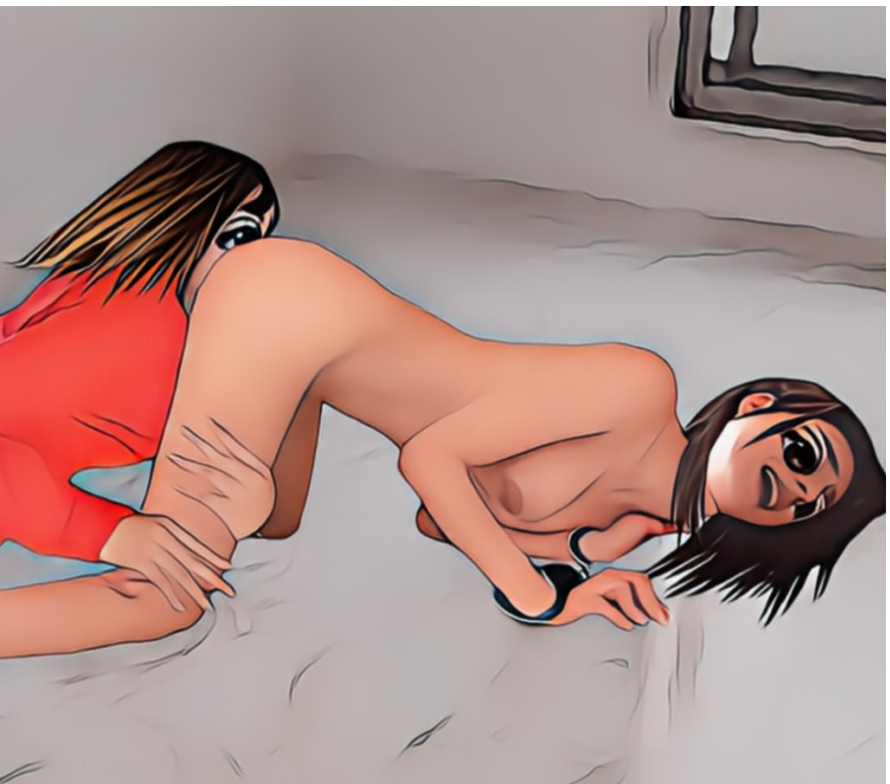
絶頂に達しようとしたら、アリサは愛撫を止めた。執拗にそれを繰り返し続けられた。美由紀は、生殺しの状態に気が狂いそうになっていた。

「どうだい。気持ちがいいだろう？ 逝きたいんなら、アタイにお願いするんだね」

「……」

アリサは美由紀をうつ伏せにして、盛り上がった白い尻に顔を入れ、片手を美由紀の下腹部に入れクリトリスを指先で刺激しながら、音を立てて舐り始めた。美由紀はあまりの快感に屈辱を忘れ、

喘ぎまくった。



アリサは快感のあまり失神した美由紀から離れ立ち上がった。ペニスバンドの張形部分が美由紀の愛液で濡れていた。近くに置いてあったリュツ

クから黒色の特殊ベルトを三つと携帯電話を取り出し、それらを持ち、柱に縛り付けられていた女達に近づいた。二人の女達はアリサが身に付けているペニスバンドの張り方に視線を吸い寄せられていた。無視しようにも顔を動かすことすらできなかった。

アリサは鼻歌を歌いながら、ふたりの首に特殊ベルトを巻き付けた。残りのひとつを五メートルくらい離れた床に放り投げた。

「こいつが何だかわかるかい？」

アリサは、長身でモデルのような美しい顔立ちをした美奈の黒髪を撫で上げながら言った。

「……」

美奈は俯き、震えるばかりであった。

「あれを見ていてご覧」

アリサは、床に転がっている特殊ベルトを指差し、携帯電話のボタンを押した。閃光が走り、爆発音が響き渡った。床に転がっていた特殊ベルトが爆発し、大理石の床に十センチ四方の穴を穿った。

「わかったかい？アタイに逆らったら、こいつのボタンを押すよ。そしたら、ドカンという訳さ。首から上が無くなっちゃうんだよ。それにこいつから百メートル以上離れたら、自動的にドカンといく仕組みになっているのさ。外そうとしても同じだよ。防水性になっているから風呂に入っても

大丈夫なんだよ」

アリサは楽しそうな笑みを浮かべていた。二人の女達は目を見開き、恐怖の表情を浮かべ、震え慄いていた。

「さあ、楽しいストリップの時間だよ。香織、冷蔵庫から冷えたビールを持ってきておくれ」

香織に携帯電話を見せつけるようにして命令した。

「はい」

香織は蚊の鳴くような声で返事をして、キッチンに小走りで向かった。

「お前はこっちにおいで」

美奈の肘を掴み、居間の中央に連れて行き、そ

ここに立たせた。アリサは近くに置かれたイタリア製の高級ソファに深々と腰かけた。美由紀は全裸のまま、失神し床に倒れたままだ。アリサも全裸にペニスバンドを装着しているだけだった。キツチンから香織が戻ってきて、アリサに缶ビールを手渡した。

「さあ、美奈。着ている服を全部脱ぐんだ。逆らったらこれだよ」

携帯電話を見せつけるように言った。

「香織、お前はここにきて、アタイのマ*コを舐めるんだよ。早くしないと分かっているね？」

香織はふらふらとした足取りで、アリサの前に膝間ついた。アリサは張り方を掴んで持ち上げ、

股間を剥き出しにした。目の前で茫然とした表情で固まっている香織の髪を掴み、股間に顔を押し付けた。香織は泣きながら、アリサの膣に口を付け、舌を使い始めた。

「なかなか、上手だよ。ケツに指を入れてくれな
いか。かき回しておくれ」

アリサが腰を浮き上がらせるようにすると、香織は恐る恐ると言った感じでアリサのアヌスに指先を入れてきた。

「そうだよ。その調子だよ。お前はなかなか素直だから、生かしておいてあげようかね。美奈！何
やっている。早く脱ぎやがれ。ぶっ殺すよ！」

アリサの劍幕に美奈の顔はいつそう蒼白になっ

た。ゆっくりとした手付きで、着ていた衣服を脱ぎ始めた。

「ブラもパンティも外すんだよ！」

美奈は追い立てられるようにして下着を外した。あまりの屈辱に心が張り裂けそうになった。たまらず嗚咽を漏らしていた。素肌は雪のように白くて、シミひとつ無く乳房も大きすぎず、尻も適度な大きさがあった。

「いい乳してるじゃないか。今度は後ろを向いてケツを見せな」

美奈は泣きながら、アリサに背を向けた。シミひとつなく、むき卵のようにすべすべで白い尻にアリサの視線が釘付けとなった。

「ブラボー！最高だよ。何てきれいな肌してるんだ。尻の形も惚れ惚れするくらいだよ。こっちに
来て、もっとよく見せておくれ」

アリサは上擦った声で命令した。瞳は欲情に濡れていた。ソファの横に立った美奈を両手で引き寄せ後ろ向きにさせた。腰を掴み顔に近づけた。美奈の盛り上がった白い尻の合間に顔を押し付け、匂いを嗅いだ。

「ウォシュレット使っているだろう？臭くないよ」

言った後で、舌を出してアヌスをペロリと舐め上げた。

「少し塩味が効いていておつな味だよ」

アリサは、激しい勢いで美奈のアヌスを舐り始めた。美奈は両手で顔を覆い、声を上げて泣いていた。美奈は同性との性的な体験は皆無であった。同性に辱められる屈辱に気が狂いそうになっていた。アリサの舌が動くたびに、意識が遠のきかけた。



た。アリサは美奈のアヌスを十分に堪能した後で、
今度は自分の方を向かせ、剥き出しにされた臍に
喰い付いた。すぐにピチャピチャと臍を舐る卑猥
な音が、聞こえてきた。美奈は、美しい顔を羞恥
と屈辱に歪ませていた。

アリサの手が忙しそうに、美奈の盛り上がった
白い尻を這いまわっていた。

「香織。今度はお前がオナニーをする番だよ。素
っ裸になって、テーブルの上に乗るんだ」

アリサは、臍を舐めさせていた香織に命令した。
香織はよろよろとした足取りでテーブルが置かれ
ている場所に移動し、衣服を脱ぎ始めた。すぐに
色白でグラマーな肢体が露になった。ガラステー

ブルの上に座り、俯いて自分の股間を弄った。

「もっと足を開くんだよ。気を入れないとぶっ殺すよ！」

香織は、すべすべでむっちりとした白い太腿を大きく広げ、膣を剥き出しにして、指先でクリトリスを刺激し始めた。

アリサは、その様子を食い入る様子に見詰めながら、美奈の膣に指先を挿入した。

「なあんだ。美奈ちゃん。濡れているじゃない。そんなに良かったのかい？」

美奈の素肌は羞恥のためか、ほんのりと赤みやさしていた。アリサは美奈を前向きに、抱きかかえるようにして張り方を膣に挿入し、腰を上下さ

せた。

アリサの腰が動いたたびに張り方で膺壁を擦られ、美奈は美しい眉間に皺を寄せて、小さな喘ぎ声を洩らした。美奈は己が運命を諦めていた。アリサの考えひとつで命を奪われてしまうのだ。美奈は絶望に打ちのめされながらも、小波のように寄せでは帰す快感に溺れかけていた。

「本当にお前は可愛いね。身体もきれいだし、お前は最後まで生かしておきたいよ。最後には美味しく料理して食べてあげるからね」

アリサは腰を上下させながら、上擦った声で言ってから美奈の唇を奪い、舌を吸い出し、存分に舐めた。

第一章 追跡者

午前十時三十分。場所は北海道苫小牧市から北に国道を二十キロほど進んだパーキングエリアに黒塗りのジープが停車していた。その車両は自衛隊の高機動車であるH M Vとよく似た形状をしていた。車長はH M Vより一メートルぐらい長く、六メートルほどもあった。

周囲は深い原生林に覆われていた。車内には警視庁公安部外事一課警視の工藤真弓と部下の桜井由香が乗っていた。真弓がナビゲーションシステムを、由香がノートパソコンを操作していた。由香は今年、警察学校を卒業したばかりの新米刑事であった。真弓が派出所勤務の由香を外事一課に

引き抜いたのであった。二十二歳の若さで刑事になるのは異例のことであった。

由香は、真弓と同様に美人女優といっても通用するような美しい容姿をしていた。

二人は逃走中のアリサを追っていた。これまで真弓と行動を共にしていた瞳と玲子は一旦、本部に戻り後方支援任務につくこととなった。由香は真弓の要請により、新たに作戦部隊に加わった。

警察学校では、必須科目である柔道や剣道などの体術は苦手であったが、コンピュータの専門家でもあり、情報収集能力に長けており銃器の扱いにも精通していた。

「由香ちゃん。何か掴めた？」

「済みません。警視。アリサの犯罪履歴を調べているのですが、ほとんど痕跡が見つかっていません」

「別動隊から何か連絡あった？」

「いえ、今日は何も連絡はありません」

逃走したアリサを追って機動部隊が山林に分け入り、搜索を続けていた。

「少し、休憩しない？」

「そうですね。休みましょう。今、コーヒーを炒れますね」

由香は助手席から車両後部に移動し、コーヒーマーカーに挽いたコーヒー豆を入れた。真弓も後部に移動し、二人掛けの椅子に腰かけた。車両後

部は、キャンピングカーのように、小型ベッドやシャワー付きトイレが備え付けられていた。北海道のように広大な地域で犯人を追跡するには、必要な装備であった。

由香が二人分のコーヒーカップを手にして、隣に座った。由香は超ミニのスカートを穿いているので、雪のように白くきれいな長い足が更に際立って美しかった。

「すべての交通機関に協力を要請していますから、道外に逃亡したとは思えません」

「奴は真理子を殺害し、美由紀を拉致したのよ。絶対に捕まえて見せるわ」

真弓の瞳には、堅い決意の光が見えていた。

「絶対に捕まりますよ。あーあ。コーヒー飲んだのに眠くなっちゃった」

由香は座ったまま、大きな伸びをした。

「休んでいいわよ。私はやることがあるから、もう少し起きているわ」

由香は疲れていたようで、車両最後部にあるベッドに横になると、すぐに寝息を立て始めた。

真弓は一人掛けのシートに腰掛け、ジュラルミンケースを小型テーブルの上に載せ蓋を開けた。

中には、自衛隊の正式銃である八九式自動小銃や九ミリ機関拳銃それにシグザウエルP二二六などの銃器が納められていた。すべて自衛隊から特別に借用したものだ。アリサを逮捕する際には、激

しい銃撃戦になることが予想された。

真弓は小型ベッドで可愛い寝息を立てている由香を見詰めた。由香をこの危険な任務に連れてきたことを少し後悔していた。アリサに捕まれば、殺された真理子と同じ運命が待っているのだ。

アジト攻略後に、アリサ達の一味が、拉致した女達を調理して食べていたことが判明した。真理子も全身を切り捌かれた無残な状態で発見された。死体の近くに置かれたテーブルには食べ残しのステーキ肉があり、それは真理子の肉体から切り取られた物であった。

銃撃戦で射殺した犯人達の司法解剖を行った際に、胃部から消化しかけた人肉が発見されていた。

拉致監禁されていた女達も数名救出した。彼女達は食糧庫のような場所に家畜同様の状態で飼われていた。発見が遅ければ彼女達も真理子と同じ運命を辿った筈だ。真弓は身震いした。人が人の肉を食することなど想像もできなかった。拉致された美由紀のことが心配でならなかった。

生きていることを心から願っていた。

真弓は首を横に軽く振り、銃器の点検作業を再開した。シグザウエルの銃床を握りしめた。完璧な状態の銃器を身に付けることで、不安はいくらか解消することができた。銃身を外し、連結部にグリースを塗った。予備のマガジンに九ミリ弾を

装填していく。

ひととおり、銃器の点検作業を終えてから、真弓は椅子に座ったまま優雅な仕草で小さな伸びをした。警視庁一番の美貌を持つと言われる真弓であった。

二十代の若さで警視となるのは、異例のことであり、真弓が単なる美女と言う訳では無いことを裏づけていた。

立ち上がり、車両最後部にある簡易ベッドに向かった。毛布に身を包んだ由香が可愛い寝息を立てていた。由香も真弓に劣らぬほどの美貌とスタイルの持ち主だ。車幅は二メートル以上もあるので、長身のふたりでもゆったりと休むことがで

きた。

真弓が着ていた衣服をすべて脱ぎ去り、由香の隣に潜りこんだ。由香も全裸であった。眠っていた由香が何か寢言を言いながら、真弓に抱き付いてきた。

すぐに真弓も可愛い寢息を立て始めた。

第二章 人食いの館

深紅のドレスを身にまとったアリサは、厨房で調理台の上に横たえられている曜子をじっと見下ろしていた。同性から見ても美しく完璧な裸身であった。肌の色が雪のように白く、手で触るとすべすべであり、肌触りは最高であった。

曜子は失神から目覚めていた。アリサの粘りつくような視線から目を反らせていた。アリサは前屈みになり、曜子の膣に鼻を付け、大きく息を吸い込んだ。微かな汗の匂いととも懐かしい枯草のような匂いを楽しんだ。

膣を指先で押し開いた。きれいなサーモンピンクの膣壁がアリサの視線を釘付けにした。

「美味しそうなオマ＊コだこと」

上擦ったように言い、口を付けた。曜子の裸身がビクンと揺れ動いた。

「敏感だね。死ぬ前に天国を味あわせてやるよ」

「……」

曜子はただ、咽び泣くばかりであった。アリサは曜子の太腿を掴み、膣に口を付けて本格的な責めを開始した。すぐに膣やクリトリスを舐る隠微な音が聞こえてきた。アリサの巧みな舌技によって、曜子の官能が掘り起こされていく。それは、死んだ恋人の圭吾からさえ、与えられなかった快感であった。あまりの快感にアリサに対する恐怖心や、同性に犯される屈辱感は、嘘のように消

えていった。それほどまでにアリサの愛撫は巧みであった。

曜子は、知らぬ間に声を出して泣いていた。腰がアリサの口に合わせるように揺れ動いていた。うつ伏せにされ、指先で膣やクリトリスを刺激されながらアヌスを舐られた。快感に耐えることなどできなかつた。アリサの顔に尻の割れ目を擦りつけるようにして果てた。それでもアリサは開放してくれなかつた。

狂ったように曜子のアヌスや膣を舐め続けた。最後には極太の張り形で膣を貫かれた。膣壁を擦られる衝撃に曜子は我を忘れて悶え狂った。アリサは腰を動かしながら、曜子の乱れる様を冷たい

笑みを浮かべながら見詰めていた。

数度目のアクメの後、ぐったりと横たわる曜子にアリサは抱き付き、曜子の柔らかい舌を吸った。

曜子はアリサに舌を与えた。

その後、凌辱は延々と続けられた。曜子は何度も逝かされ、ついには失神した。アリサは意識を失った曜子を犯し続けた。

大型のシンクに横たえ、アヌスにホースの先端を押し込み、冷水を直腸内に注ぎこんだ。あまりの冷たさに曜子が目を覚ました。

「お目覚めかい？子豚ちゃん。美味しく料理してあげるからね」

「……」

惨殺された圭吾のことを思い出したのか、曜子は泣き喚くばかりであった。曜子の嗚咽に混じり、排泄物が嘔き出される音が厨房内に響いた。

水浣腸の後、全身を洗剤で洗い清めてから、アリスは曜子を調理台の上に横たえた。調理台の下から、大振りの刺身包丁を取り出し、曜子の目の前にかざした。

「どうやって、食べて欲しい？アタイは刺身が好きなんだけど」

「お願い。殺さないで下さい。何でもしますから……」

「そうはいかないんだよ。アタイはね。お前のよ

うに美人で若い女の肉しか食えなくなったのさ。
普通の食事じゃ満足できないんだよ」

アリサは目の前で震え慄く曜子の盛り上がった
白い乳房を舐めた。

「私を……殺して……食べると言うのですか？」

曜子は泣きながら、上擦った声で聞いた。

「そうだよ。お前をこの包丁で切り刻んで、美味
しい料理を作るんだ」

曜子の乳房を鷲掴みにして、包丁を突き立てよ
うとした。

「……狂っている」

曜子は美しい顔を恐怖に歪めて、アリサを見返
した。

「アタイは自分で言うのもなんだけど、頭がいかれちまったのさ。さあ、大人しくおし。お前の肝臓でレバ刺しを作ってやるよ」

「嫌！」

曜子は叫びながら、アリサの顔面に頭突きを見舞わせた。思いがけない反撃にアリサは包丁を床に落とし、顔面を押さええながら、調理台に突っ伏した。

曜子はやっとの思いで起き上がり、厨房の出口へと向かった。ノブに手をかけた途端、背中に激痛を感じた。

「何？」

曜子の手が、自分の背中に刺さっている包丁を

掴んだ。

「よくもやってくれたね。楽には死なせないよ」

アリサが鼻から血を流し、悪鬼のような形相で曜子を睨みつけていた。

「た……助けて」

泣きながら命乞いをする曜子を調理台の上に横

たえ、背中に刺さっていた包丁を抜いた。鮮血が

噴出し天井を真っ赤に染め上げた。



包丁の切っ先をアヌスに差し込み直腸内でかき回した。曜子の苦痛にまみれた絶叫が、厨房内に響き渡った。

仰向けにされ、生きたまま片乳房を包丁で切り落とされた。曜子は息も絶え絶えに、もがき苦しんでいた。アリサは残忍な笑みを浮かべながら、曜子の柔らかい腹部に包丁を突き立てた。

三十分後、アリサは、手足を切断され、内臓を取り除かれた曜子の胴体を厨房の隣にある大型冷蔵庫の天井からフックにかけて吊るした。今晚のオカズは曜子の腿肉で作るステーキにしようと考えていた。

翌朝、アリサは朝から、熱々のステーキ肉に舌鼓を打っていた。ステーキ肉は曜子の腿肉から切り取ったものだ。肉はレアでナイフを入れると血が滴った。

美奈と香織の朝食は、アリサが朝食を済ませてからだった。アリサは、二人に床に這いつくばって食事をするように強要した。しかも手を使うことを許さなかった。まるで家畜なみの扱いだった。

食事の後は、再び陵辱が始まった。アリサは二人を四つん這いにして、尻を手のひらで交互に叩いた。赤く腫れ上がるまで止めなかった。

スパンキングの後は、美奈を仰向けに、香織をうつ伏せにして、乳房や膣や尻を思う存分に舌で

弄んだ。二人がいくまで止めなかった。

前技の後、アリサは長大なペニスサックを装着し、二人を交互に前後から犯し始めた。限りない陵辱が、延々と続けられた。

美由紀は、裸電球のみの薄暗い部屋で目覚めた。

壁一面の棚には様々な形状の鞭や浣腸器などS
M道具が並べられていた。

すぐに乳房と股間に異様な感觸を覚えた。見ると全裸の香織が、美由紀の乳房を舐め、股間には美奈が張り付いて膺を舐めていた。両手に力を入れようとしたが、手首をベルトで椅子に固定され動かすことはできなかった。両足首もベルトで固

定されていた。両足は大きく開かれていた。

「お目覚めのようだね？」

すぐ近くに真紅のドレスを着たアリサが、赤ワインを満たしたグラスを手にして、一人掛けのソファに深々と腰かけていた。

「いったい私をどうするつもりなの？」

「決まっているじゃないか。お前はアタイの慰み者なんだよ。気が狂うまで、これから存分に犯し抜いてやるよ」

アリサはワイングラスをテーブルの上に置いて立ち上がった。クリニングスをしている美奈の肩を引いて、止めさせ、手に持っていた小瓶の蓋を開け、中に入っていたゼリー上の液体を美由紀の

膣やアヌスに塗り込んだ。媚薬をたっぷりと塗りこんだアリサの指先が膣やアヌス奥深くまで侵入していた。

「この部屋で見つけた媚薬だよ。たっぷり逝かしてあげるからね」

媚薬を塗られた途端に膣やアヌスが熱を帯び始めた。すぐに爛れるような快感が湧き上がってきた。

「美奈。今度は舌じゃなくて指で楽しませてやいな」

美奈は言われるままに美由紀の膣とアヌスに指先を入れて、中をかき回した。

膣壁を指先で擦られ、直腸をかき回されるだけ

で思わず喘ぎ声を漏らしてしまった。媚薬の効果もあってか、これまで感じたことの無い快感の波が押し寄せてきた。美由紀は声を上げて泣いていた。到底耐えることなどできなかった。

美由紀が身悶えする様子をアリサは、近くに立ち食い入る様に見詰めていた。ときおり、手を伸ばし美由紀の乳房や尻を触ってきた。

それから三日三晩、美由紀は拷問部屋で女達による性的拷問を延々と続けられた。

大人が五人でもゆったりと入れるバスルームでは、女達による隠微な責めが始まっていた。

美由紀は床にうつ伏せの姿勢を取らされ、白く剥

き卵のような尻を高く上げさせられていた。後ろ手を縛られているので顔で上半身の体重を支えなければならなかった。これからの陵辱を思っつか、美由紀の肩が微かに震えていた。

「おい。香織。美由紀の穴を舐めるんだよ」

床に座り、両足を大きく開き、美奈に膣を舐めさせているアリサが命じた。

「はい」

香織は、美由紀の太股を広げ、尻を大きく割った。サーモンピンクのきれいなアヌスに唇を押し付けた。舌先でアヌスを、小鳥が餌をついばむように軽くつついた。硬い蕾がいつしか潤み始めた。舌先を尖らせ、アヌスに挿入した。

「ああ……」

美由紀の喘ぎ声がバスルームに響いた。

「オ*コも可愛がってやるんだ」

香織の白魚のような指先が、美由紀の膣に吸い込まれた。指先をゆっくりと出し入れした。

香織は若く美しい美由紀のアヌスに痺れるような甘美な味わいを感じていた。目を閉じて、膣に挿入した指先を激しく動かし、舌先を可能な限りアヌスに差し込んだ。できることなら目の前にある美由紀の白く大きなお尻を食べてしまいたかった。

アリサは美由紀の尻を押し広げ、巨大な浣腸器の先端をアヌスに差し込んだ。

「うっ…」

美由紀が身体を反らし、苦悶の表情を浮かべた。一リットルの浣腸器が、美由紀のアヌスに打ち込まれ、内容液が見る間に注入されていった。肩が小刻みに震え、腹部が波打ち始めた。腰が艶めかしく前後左右に動いた。

「出ちやう。トイレに行かせて！」

「そのタライにするんだ。遠慮はいらない」

「お願い！」

「お前は牝豚だ。人間じゃないんだよ」

苦悶の表情を浮かべる美由紀の髪を鷲掴みにして、臍に指先をねじ込みかき回した。

「ああ…」

突然、ぶりぶりという排泄物を、ひじり出す音が響いた。美由紀の可愛いアヌスから排泄物がひじり出された。すぐに異臭がバスルームに広がった。

「臭いね。窒息しそうだよ。香織、その糞をトイレに捨ててきな。美奈はシャワーで洗い流すんだ」

香織は排泄物が入ったタライを持ち、バスルームに隣接したトイレに消えた。

美奈は、ぐったりとして床にうつ伏せになっている美由紀の尻に熱く強烈なシャワーをかけた。

指先にボディースープを塗り、アヌスにすり込んだ。美由紀が喘ぎ声を上げ、腰を浮かせた。美奈は美由紀の尻を割り、アヌスをシャワーで洗い

流した。

「まだ、終わりじゃないんだよ」

アリサは美奈を脇に押しやり、美由紀の股間に手を差し入れ、腰を持ち上げた。新たに一杯に満たした浣腸器の先端を差込み注入した。

「止めて。お願い！」

号泣する美由紀に構わず、すべてを注入した。すぐに美由紀の腹のあたりから、ゴロゴロという音が聞こえ始めた。苦痛のためか腰を艶めかしく動かし始めた。アリサは、美由紀の胸に手を差し込み、豊かな乳房を絞り上げた。

「駄目。出ちゃう！」

アヌスが口を開け、液状になった排泄物が吹き

出した。すぐに美奈がシャワーをかけ、洗い流した。浣腸・排泄の儀式は四度にわたって繰り返された。

最後には排泄物ではなく、浣腸液のみを排出した。浣腸器のかわりにホースの先端を押し込み、お湯で内部を洗浄した。

「どれくらいきれいになったかね」

美由紀の尻の後ろにしゃがみ込んだアリサが指先を伸ばし、アヌスに差し込んだ。

「痛い！止めて！」

美由紀の身体は反り返り、額からは冷や汗が、滴り落ちた。アリサの手は右手首まで、アヌスに収まっていた。ニヤニヤした笑みを浮かべ、直腸

内部をかき回した。美由紀は絶叫を放ち、尿を迸らせた。

暫く、直腸のヌルツとした感触を味わった後に、体液まみれの手を抜き、匂いを嗅いだ。異臭は感じられなかった。

「食べ頃だね。おい。この牝豚を屠殺する。お前達は押さえていておくれ」

アリスは宣言し、台所から持ち出した太さ五センチ、長さ五十センチのスリコギを構えた。二人の女達によって、四つん這いの姿勢で、両手両足を押し込まれた美由紀のアヌスに押し当てた。そして一気に押し込んだ。

「ギャー！」

美由紀は目を白黒させ、足を突っ張らせ、アヌスにスリコギを咥えたまま失神した。五十センチはあるスリコギが、四十センチあまりアヌスに埋没していた。

「どうだい。特大のペニスで犯される気分は？」

アヌスをスリコギで貫かれ、虫の息で床にうつ伏せの姿勢で横たわる美由紀の頭を持ち上げ、刺し身包丁を首に当て一気に引いた。

喉がぱつくりと割れ、鮮血が勢い良く吹き出した。見る間に床に広がっていき、排水溝に吸い込まれていった。

突然、ガタンという物音がした。振り返ると女

達二人が床で伸びていた。ショックで失神したもののらしい。香織の股間から湯気が出ていた。アリスは、死の痙攣を始めた美由紀の膣に指を挿入し、感触を楽しんだ。

三十分後、バスルームで、アリスは二人がまだ失神している中、美由紀の解体に取り掛かった。豊かな乳房の根元に刺し身包丁を入れ切断した。血抜きが完全なのか一滴の血も流れなかった。次に死体を裏返しにして、剥き卵のような尻を切り分けた。この部位が最も好きな部分だった。さらに腹を縦に割き、内臓を掴み出した。腸と肝臓と心臓のみを取り、後は捨てることにした。

鳥のササミより旨い太腿の解体に取り掛かった。
自然に生唾がでてきた。

一口大に切り取り、口に放り込んだ。甘い肉汁
が口内に広がった。牛刺よりもいけた。それを咀嚼し飲み込んだ。さらに一切れをつまんだ。

性器はまるごと慎重に股間から切除した。ここも好きな部位だ。極上のフィレ肉だ。

約一時間をかけて、肋骨を含むすべての肉を解体した。後にはバラバラにされた美由紀の遺体がバスルームの床に転がっていた。

尻や腿の肉は、ステーキ大に切り分け冷凍庫に入れた。解体途中のつまみ食いのせいで空腹は満

たされていた。冷蔵庫のチルド室に明日食べる分を入れ、後の肉や内臓はすべて冷凍庫に収めた。

美由紀の解体作業を終え、床で伸びている二人をたたき起こした。目が覚めた二人は、激しく嘔吐し始めた。目の前には、美由紀の残骸である骨や肉片が散乱していた。アリサは笑いながら二人にシャワーを振り掛けた。

「わかっただろう。アタイに逆らうとこうなるのよ」
と猫撫で声で呟いた。

その後、二人を後ろ手に縛り上げ、二階にある

寝室に連れ込んだ。

「美奈お前は、オマ＊コ。香織はアヌスを舐めて」

二人の女達は、言われるままにアリサの秘部に唇を押し付けた。アリサの脳裏に心地よい眠気と、股間から痺れるような刺激が広がっていった。

美奈の魅力的な太股を引き付け、股間に頭を入れてクリトリスを口に含み目を閉じた。

翌朝、アリサは別荘の裏手にある森から聞こえてくるカッコウの鳴き声で目が覚めた。アリサの目の前に、美奈のふくよかな尻があった。まだ眠りの中にいる美奈の顔に股間を押し付け、美奈の

太腿を押し広げ、臍に舌を這わせ始めた。

「あそこを舐めるんだ。アヌスに指を入れてかき回しな」

気配で目を覚ました美奈に命令した。

アリサは美奈を従えて、トイレに向かった。トイレは窓からの採光で明るく、便座は洋式でウォシュレット付きであった。アリサは美奈を前に立たせたまま、便座に跨り用を足した。ウォシュレットで洗浄した後、美奈にアヌスの飛沫を拭き取らせた。

「きれいになったか舐めてみて」

そういつて壁に両手を突いて、尻を美奈に突き

出した。美奈は無言のまま、両手でアリサのむっ
ちりとした太腿を抱き寄せ、豊かな尻の割れ目に
顔を押し付けた。

目を閉じてアヌスに舌を這わせた。ウォシユレ
ットで洗浄したため、異臭は感じられなかった。

「私の穴は旨いかい？」

「……はい」

その頃、キッチンでは香織が、全裸にエプロン
を着けただけの姿で、朝食の支度を行っていた。

戒めは解かれ、自由になってはいたが、逃げ出
そうとはしなかった。拘束ベルトを首に巻かれて

いる限り脱出は不可能に思えた。昨日の美由紀を屠殺する様子を思い出すと、今でも全身に鳥肌が立った。

香織は、ステーキ肉を焼いていた。アリサは朝からステーキを注文した。香織はそれが美由紀の尻肉であることを聞かされてはいなかった。

フライパンの中で、十分に脂がのった赤身肉が肉汁を吹き出しジュウジュウと音を立てていた。

塩・胡椒で味を調えた。

美奈と香織の二人分は、ごはんと干物のごく普通の料理だった。

テーブルに付いたアリサの股間には、美奈が膝立ちになり、臍を必死に舐めていた。二人とも全

裸だ。

テーブルの上には、焼きたてのステーキと、全裸姿の香織が、うつ伏せの姿勢で横たわっていた。豊満な尻の隆起が、女の美しさを凝縮しているかのようだった。

アリサは、ジュウジュウと音を立てているステーキに、フォークとナイフを当てた。一口大に切り取り、口に放り込んだ。

「旨いね。やっぱりステーキは牝豚の尻肉に限るよ」

アリサは尻肉をほお張りながら、テーブルに横たわる香織の盛り上がった尻をじっと見詰めた。

「黙って寝てないでオナニーでもやってみな」

香織の顔は、羞恥のためか赤くなり、目には大粒の涙を溜めていた。うつ伏せのまま、白魚のような指先を膣に入れ、静かに動かし始めた。

「ケツにも指を入れるんだ。気をやらないと次はお前だよ」

香織は言われたとおりに指先をアヌスに滑り込ませた。暫く自慰を続けた後、尻を妖しく左右に振りながら、大きな喘ぎ声を上げ果てた。アリサは香織の痴態を眺めながら美由紀の尻肉ステーキをほお張っていた。

趣味の悪い塗装を施したワンボックスカーの後部座席では、二十代半ばくらいの若い男が、全裸

で二十歳くらいの美しい女を組み敷き、激しい勢いで腰を動かしていた。

全裸に剥かれた女は美しい顔を苦痛に歪め、泣き叫んでいた。

助手席では、二十代前半くらいで、けばけばしい化粧をした女が、笑いながらその様子を携帯電話のデジカメで撮影していた。

男は荒い息をしながら、女の膣に精液を注ぎこんだ。

「もう終わりなの？つまんない！」

助手席の女が素っ頓狂な声で言った。

「るせんだよ」

男は、さめざめと泣く女から離れ、タバコに火

を点けた。

「この女どうする？」

「顔を見られているからな」

男はタバコを吸いながら、のんびりとした調子で答えた。片手は忙しそうに女の尻を撫でていた。

「そうだ。浩二。山奥に行こうよ。縛って置き去りにしたらいいよ。クマが餌にしてくれるから」

「そうだな。でも誰かに見つかるかも知れない：

…」

浩二は最後の言葉を濁し、女の顔に卑猥な笑みを投げた。

「お願い。帰してください」

モデルのように美しい顔立ちをした女は泣きな

がら懇願した。

「お前、香奈っていうのか？」

浩二は女のバックに入っていた免許証を見ていた。

「助けて下さい。何でも言うことをききますから」

香奈は継るような目つきで浩二の顔を見た。二人が自分を殺そうとしているのは明らかだった。

「絵里。これから山奥にドライブだ。お前が運転しろ」

浩二は、香奈の懇願を無視し、助手席に座っていた絵里に命令した。

「OK！」

ワンボックスは、タイヤを軋らせながら、勢い

よく発進した。浩二は全裸の香奈に抱き付き、唇を奪い下半身を撫でまわし、膣に指先を挿入してかき回した。車内には香奈の咽び泣きと膣内をかき回す卑猥な音が響いていた。

それから一時間ほど、三人を乗せた車は深い森に囲まれた林道を進んでいた。浩二は、香奈を膝の上に座らせ、乳房を驚掴みにしながら膣を犯していた。香奈は泣きはらした顔で、茫然と窓外を眺めていた。それから、暫く林道を走り続けた。

林道のカーブを曲がり切ったところで絵里が急ブレーキをかけた。

「危ねえじゃないか！」

浩二が、香奈の盛り上がった白い尻の割れ目から顔を上げた。直前まで、シートの上に、うつ伏せにした香奈のアヌスを舐めていたところだ。

「見てごらんよ。こんなところに家があるよ」

三人を乗せたワンボックスは、徐行しながら、深い森に囲まれた、広さ数百坪はある敷地内に侵入した。目の前に白亜の豪邸が現れた。

「馬鹿野郎！何考えているんだ？」

浩二は豪邸正面の駐車場に入ろうとする絵里を叱責した。

「いいじゃん。どんな奴が住んでいるか見てくる

よ」

「お前、正気か？」

浩二は香奈の口を片手で塞ぎながら言った。

「浩二好みのいい女がいるかもよ。それに持ち主は金持ちに決まっているよ。ぶち殺して有り金全部まきあげるっていうのはいいアイデアでしょう。香奈を黙らせておいてね。カーテン閉めたら外から見え無いじゃん」

「まったく、呆れたスケだよ。お前は」

「アレ借りるね。香奈と楽しんでいて。何かあったら叫ぶから助けに来てね」

絵里はダッシュボードから、刃渡り二十センチほどの狩猟用ナイフを取り出し、ハンドバックに仕舞い込んだ。

「気をつけろよ」

浩二は、車内から絵里を見送った後で、カーテンを閉めた。シャツの胸ポケットからスイツチナイフを取り出し、香奈の頬にあてた。

「騒ぎやがったら、決るからな」

「……」

香奈は大きな瞳を見開き、大きく頷いた。浩二は、香奈を後ろ向きに抱き上げ、自分の股間に座らせた。

「ケツを上げるんだ」

浩二は、背後から香奈の盛り上がった白い尻を食い入る様に見詰めてから、腰を引いて、アヌスに男根の先をあてがった。少し前まで舐っていた

アヌスに男根を突き込んだ。激痛に叫びだそうとする香奈の口を片手で塞ぎ、激しい勢いで腰を下させた。狭い直腸が男根を包み込む、きつい締め付けにすぐにも逝きそうだった。

「最高に絞めつけやがるぜ。マ*コもいいが、こっちも最高だ」

浩二は呻くように言いながら、腰を振った。香奈が美しい眉間に皺を寄せ苦しそうに呻いていた。アヌスを犯されるのは初めての体験だった。肛門が引き裂かれ、内臓がかき回される感覚に吐きそうになっていた。

幸いにも浩二は、一分も持たずに射精した。アヌスから男根を引き抜き、零れおちる精液を気だ

るそうに見ていた。香奈はうつ伏せになり、声を上げて泣いていた。

極上の美尻を見ているうちに再び高ぶってきた。香奈を荒々しい手つきで仰向けに横たえ、両足を大きく広げさせ、剥き出しにした股間に喰い付き、音を立てて膣を吸った。舐めても、舐めても高ぶりは収まらなかった。

香奈の寝ていても崩れない乳房を舐めながら、正常位で貫いた。香奈は髪を振り乱し泣き喚いた。口を手で塞がれているので、大きな声は出すことができなかった。浩二は逝く寸前で膣から男根を抜き、香奈の口に押し込んだ。香奈の柔らかな舌に包まれ男根は弾けた。

「絵里の奴。遅いな」

浩二は香奈の口に男根を入れたまま、独り言を呟いた。カーテンを開き家の様子を伺った。玄関に絵里の姿は無かった。

その時、目の前を何かが通り過ぎた。次の瞬間、轟音がしてワンボックスの天井を何かが突き破った。天井から車内に突き出しているのは手斧の刃だった。それが抜かれ、今度はフロントガラスが粉々に砕け散った。

「何しやがるんだ！」

浩二はスイッチナイフを掴み、車外に飛び出した。目の前に若くて、冷たい美貌を持った女が、手斧の柄を肩に載せて立っていた。アリサだった。

「色男のお出ましいかい」

アリサは、冷たい笑みを浩二に投げかけた。

「糞アマ。俺の大事な車を壊しやがったな！犯してから切り刻んでやるぜ」

浩二は斧を持っているとは言え、女のアリサを侮っていた。スイッチナイフをかざしながらゆっくりと近づいた。アリサは持っていた手斧を地面に落とした。

「降参したって俺は絶対に許さないぜ。着ている服を全部脱ぐんだ」

アリサはタンクトップTシャツを脱ぎ捨てた。ブラは付けておらず、豊満な乳房が零れ落ちた。

次に、超ミニのスカートをあっさりと脱ぎ捨てた。

パンティは履いておらず、股間の陰影が浩二の視線を貫いた。浩二はスイッチナイフを胸ポケットに仕舞い込み、アリサに大股で近づいた。女のアリサが怯えきっているものと思っていた。おもむろにアリサの乳房を驚掴みにした。手の中で柔らかい肉球が弾けた。今少し前に香奈の膣に射精したばかりだというのに、若い浩二の男根は極限まで張りつめていた。アリサの背後に回り、膝間ついて剥き卵のようにすべすべで白い尻を両手で押し広げ、顔を押し込み、匂いを嗅いだ。

石鹸のいい匂いがした。シャワーでも浴びていたのだろう。浩二はアリサの細い腰を押さえつけ、アヌスを激しい勢いで舐り始めた。

すぐにアリサは、鋭い喘ぎ声を上げ始めた。周囲は深い原生林が生い茂り、野鳥のさえずりが聞こえていた。

浩二はアリサを石畳の上に、仰向けに横たえ、むっちりとした太腿を大きく押し広げて、顔を入れ臆やクリトリスを舐り始めた。そこは完全に潤みきっていた。慌ただしい手つきでズボンとパンツを脱ぎ、男根を剥き出しにして、アリサの股間に押し当てた。ズブリという音を立てて臆に突き込んだ。アリサが低い喘ぎ声を洩らし、背筋を仰け反らせた。浩二はアリサの乳房を舐めながら激しい勢いで腰を前後左右に振り始めた。

香奈は車内から、ふたりの様子を盗み見っていた。

浩二が見知らぬ女を犯しているのが見えていた。

女の顔は浩二の陰に隠れてよく見えなかった。

香奈は、昨夜会社帰りに道を歩いていたところを絵里と浩二によって、車に引きずり込まれ拉致された。人気の無い場所に連れて行かれ、二人によって激しい凌辱を受けた。異性愛者である香奈は、同性の絵里により、膾やアヌスを舐られ何度も逝かされた。屈辱で気が狂いそうになっていた。浩二にも問答無用に男根で貫かれていた。

今が、逃げ出すチャンスであった。このまま、ここに残れば、二人に殺されるのは確実だ。車のキーは絵里が持っていた。徒歩で逃げるしか無か

った。座席の下にあった衣服を掴み、音を立てぬようにドアを開けた。ドアは二人と反対側にあるので見られることは無かった。香奈は足音を忍ばせながら、深い森に分け入っていった。

浩二は、アリサのアヌスに指を入れ、中をかき回しながら、膣を激しい勢いで犯していた。アリサは樹海に響き渡るような喘ぎ声を上げながら、浩二の動きにあわせるように腰を動かしていた。

浩二はアリサの唇を奪い、舌を吸いながら、絶頂に達した。アリサも同様であった。二人は少しの間、石畳の上で余韻に浸っていた。先に浩二が動き出した。胸ポケットからスイッチナイフを取

り出した。性欲が収まった代わりに、大事な車を壊された怒りが再び湧き上がってきた。ナイフをアリサの心臓目がけて振り下ろした。そのときアリサの両目が開き、右腕が鞭のようにナイフを持つ手を捉えた。ナイフが宙を飛び、茂みの中に落ちた。アリサの腹筋が盛り上がりブリッジをした。衝撃で浩二の身体が跳ね飛ばされた。

「よくもやりやがったな」

浩二は石畳に顔を打ち付け、唇を切っていた。

手の甲で拭きながら起き上った。

「なかなか、よかったよ。あんな風に犯されるのも好きなんだ。ピルを飲んでいるから妊娠する心配も無いしね」

アリサも石畳の上に全裸で立ちあがり両手を腰に当てていた。浩二はズボンとパンツを脱いでいるので、男根が剥き出しになっていた。

「野郎。ぶち殺してやる」

浩二が両手を広げ、アリサに襲いかかった。アリサの右足が鞭のようになり、浩二の股間を直撃した。浩二は低く呻いて、蹲った。再びアリサの右足が鞭のようになり、浩二の米神に炸裂した。浩二は横倒しになり、ピクリとも動かなくなった。

アリサは石畳の上に、うつ伏せの姿勢で横たわっていた。浩二を仰向けにさせた。股間の萎びた男根を驚掴みにして、満面の笑みを浮かべた。アリ

サは女も好きであったが、色男を痛めつけるのも趣味であった。

少しの間、感触を楽しんでから、浩二の車を覗き込んだ。中は蛻の空だった。後部座席の上にピンク色のパンティが落ちていた。ドアを開けて、パンティを手にとって匂いを嗅いだ。若い女の素晴らしい匂いが鼻孔をくすぐった。それから、森の方に視線を向けた。

「逃げてでも無駄だよ。お嬢ちゃん」

独り言を呟いた後で、失神したままの浩二を肩に担ぎ上げた。浩二は身長百八十センチくらいで体重は七十キロぐらいあるように見えた。身長も体重もアリサを遙かに上回っていたが、アリサは、

浩二を担いだまま悠々とした足取りで、豪邸に向かった。某国の外人部隊として活躍していたアリスにとっては造作も無いことであった。

白い大理石を敷き詰めた玄関ホールには、絵里が素っ裸に剥かれ、後ろ手に手錠をはめられ倒れていた。

「美奈に香織！こっちにきて手伝っておくれ」

アリスが二人を呼ぶと、すぐに駆け足でやってきた。ふたりとも全裸だ。淫毛も剃られ、膣口が露出していた。

「こいつを居間に運んで頂戴」

ふたりは、絵里の両手と両足を掴んで、引き摺

る様にして居間に運んだ。

居間の床に浩二と絵里の二人を並べた。二人は後ろ手を手錠で拘束されていた。

香奈は暗い森の中を彷徨っていた。人ひとりがやっと通れるくらいの獣道を進んでいた。周囲は深い藪に囲まれ、木々が陽光を遮っていた。時より、カッコーの鳴き声が聞こえてきた。今にもヒグマが現れそうな雰囲気であった。

ヒグマに襲われ生きたまま貪り食われる光景が脳裏を過った。若い女がひとりで歩いているような場所では無かった。股間には浩二の精液が貼りついており、気持ちが悪かった。背中や太腿それ

に尻にも絵里や浩二の唾液がこびり付いていた。半日もの間、二人に全身を舐められていたのだ。二人を夢中にさせるほど、香奈の裸身は美しかった。

不意に川のせせらぎが聞こえてきた。川だ。近くに川があるに違いない。香奈の歩きが早まった。数十メートル進んだところに川幅五メートル深さ三〇センチほどの清流を見つけた。清流でしか見られない水草のバイガモが水底に繁殖していた。香奈は周囲をさっと見渡して、ミニスカートとTシャツを脱いだ。パンティは車に置き忘れてきたので、穿いていなかった。全裸になって清流に入り、しゃがんで股間を洗い清めた。股間を洗っ

てから、うつ伏せになり顔以外を水に浸し、附着していた浩二の精液や唾液を洗い流した。夏とはいえ、水温は低かった。喉の渇きも覚えていたが、北海道では、どんなに澄んだ水であっても川の水は飲んではいけないと言われていた。エキノコックス感染の危険があるからだ。

全身を洗い清め、川からあがった。タオルは持っていないだったので、濡れたまま衣服を身に着けた。再び、獣道を歩き始めた。

暫く歩いていると、林道が現れた。香奈はやつと助かったと思った。自然に笑みが零れた。林道を一キロほど進んだところで前方から乗用車が進んで来るのを認めた。浩二の車では無かった。香

奈は道の真中に立ち、両手を振ってランドクルーザを停車させた。

運転席の窓が開けられた。運転していたのは、サングラスをかけたアリサであった。

「どうしたんですか？」

アリサが親切そうな笑顔を香奈に向けた。

「済みません。助けて下さい」

香奈は車内をさっと見渡した。若い女ひとりしか乗っておらず安心していった。

「理由は中で聞きますよ。乗って下さい」

ランドクルーザは香奈を助手席に乗せて発進した。

暫くの間、香奈は浩二と絵里に拉致されたこと

をアリサに説明した。アリサは、運転しながら香奈の話聞いていた。

「御蔭さまで助かりました」

「拉致されて、犯されたんでしょう？ 気持ち良かった？」

香奈はアリサの横顔を驚きの表情で見詰めた。

さつきまでとは何かが違っていた。

「……」

「貴女。本当に美人よね。女の私でも惚れてしま
いそうよ」

アリサは笑いながら、香奈の下半身に左手を伸ばしてきた。

「止めてください！ 何をするんですか？」

「いいじゃない。何なら、ここで降してあげようか？」

周囲は深い森に囲まれていた。これまで走っていて対向車は一度も現れなかった。

「……」

香奈は俯いて、押し黙った。香奈の手が容赦なく、股間に忍び込んでくる。

「あら。パンティ穿いていないのね！」

アリスは楽しそうな声で言った。しなやかな指

先が膣口に侵入してきた。

「止めて下さい！降ります。降ろして下さい」

「いいけど。家に着いちちゃったわよ」

香奈は見た。駐車場に浩二の車が止まっていた。

目の前には、見たことのある白亜の豪邸が立っていた。ランドクルーザーは浩二の車の横に停車した。

「いや！」

絶叫し、ドアを開けようとした香奈をアリサは背後から抑えつけた。着ていたTシャツを手で切り裂かれ、ミニスカートを筆り取られた。全裸に剥かれ背後から抱き付かれ、豊満な乳房を両手で驚掴みにされた。

「本当に可愛いね。食べてあげるよ」

「助けて下さい。お願いします」

香奈は髪を振り乱し懇願した。

「駄目だよ。肉が切れちゃってね。お前本当に美味しそうだね。オツパイも肉がぎっしりと詰まっ

ているし、ケツも脂が載って旨そうだよ。刺身にして美味しく頂こうかな。そうだ、お前、野菜は好きかい？」

「何を言っているの？」

香奈にはアリサの言っていることが理解できなかった。

「だから、お前を食べると言っているのさ」

男女の間では、食べるということはセックスするということもあった。香奈の脳裏に、同性の絵里によってさんざん弄られた記憶が蘇った。

「いや！変態！離して」

「無駄だよ。食う前に何度も逝かしてあげるよ。

冥途の土産にするんだね」

脇腹に片手を回され、凄まじい力で引き寄せられた。アリサは香奈を車内から引きずり出して、肩に軽々と担ぎ上げた。香奈の盛り上がった白い尻が無残に震え慄いていた。

半日後、香奈は一階にある大浴場の床に、全裸で四つん這いの姿勢を取らされていた。香奈はアリサによって何度も逝かされたのか、疲れきって虚ろな表情をしていた。アリサが背後から極太の浣腸器をアヌスに差し込んできた。冷たい薬液が腸内に滲入し、すぐに排泄感が湧き上がった。アリサに下腹部を揉まれながら、排泄した。

「臭いね。やっぱり美人でも糞は臭いね」

アリサの笑い声が聞こえてきた。アリサはシャワーで汚物を排水溝に流し込んだ。これまで手や口や張り形で散々に犯され、羞恥心は消え失せていた。その後何度も浣腸と排泄は繰り返された。

「きれいになったわね。水しか出なくなっただわ」

香奈は朦朧とする意識の中で香奈の声を聞いていた。不意に背後から抱きつかれた。首筋に冷たい物を押し当てられた。

「美味しい料理になってね。アタイの可愛い子豚ちゃん」

「耳元でアリサの上擦った声が聞こえてきた。続いて首筋に激痛が走った。視界の中に真っ赤なシヤワーが見えた。やがて香奈の意識は深い闇に包

まれた。

首筋をナイフで抉られた香奈の死体の横には、アリサが全裸で立ち、香奈の死体を見下ろしていた。アリサは、香奈の死体を仰向けに横たえ、ナイフで乳房の下から、下腹部までを縦に切り裂いた。切り裂かれた腹腔に両手を突っ込み、血塗れの内臓をかきだした。取りだした肝臓の端をナイフで切り取って口に入れた。

「お前のレバは本当に美味しいよ」

その後でアリサは内臓を取り除いた香奈の死体をシャワーで水洗いした。

一階にある厨房では、香奈の死体が仰向けで調理台の上に横たえられていた。殺されてから五分もたっていないかった。香奈は腹部を縦に切り裂かれ、内臓を取り除かれた死体となっても十分に美しかった。その傍らにはアリサが鋸を持ち立っていた。死体の横には大振りの刺身包丁が置かれていた。

アリサが鼻歌を歌いながら、香奈の片足を太腿の付け根から鋸で切り落とした。足を切断し、両手も付け根から切断した。切り落とした両手両足から、刺身包丁で肉を切り削いでいく。露出した骨はハンマーで打ち砕き、水を張った大鍋に投げ込んだ。両乳房を切り落とし、胸の皮を剥いで胸

肉を削ぎ落した。股間に刺身包丁を入れ膾肉もきれいに削ぎ落した。

うつ伏せに横たえ、腰を片手で押えこんで、包丁を盛り上がった白い尻に刺し、サクサクという音を立てながら、尻肉を削ぎ落していく。

一時間くらいで、香奈の死体は完璧に捌かれ、肉と骨に分離された。アリサは手際よく香奈の肉をタッパーに入れ、冷蔵庫に保存した。残った骨もビニール袋に入れて冷凍庫に納めた。

調理台の上には、香奈の頭部のみが、残されていた。アリサは髪を掴んで持ち上げ、ゴミ箱に捨てた。

残しておいた尻肉と太腿肉を調理台に載せた。

腿肉は二切れに、ステーキ台の大きさに切り分けた。尻肉は薄くスライスして大皿の上に盛り付けた。

時刻は午後六時を少し過ぎた頃だ。ダイニングルームでは、アリサがひとりで夕食を摂っていた。テーブルの上には、調理された香奈の肉が皿に盛られていた。アリサにとって久しぶりの新鮮な肉であった。極上の女を犯し抜き、最後に自らの手で殺し、その肉で料理を作ることにアリサは酔いしれていた。

香奈の尻肉ステーキをナイフで切り、フォークで口に運んだ。口内に芳醇な香りの肉汁が満ちた。

あまりの美味にアリサは思わず、深い溜息をついた。

香奈の美しい肢体を思い出しながら、ステーキ肉を頬張った。臆肉もステーキにしていた。アリサの好物だ。コリコリとした歯触りが堪らなかった。

アリサは食事をしながら、もっと新鮮な肉が必要であると思った。若くて美しい女達を浚って来て地下室で飼おうと思い付いた。

夕食後、アリサは地下の拷問部屋に向かった。

部屋には浩二と絵里が監禁されていた。浩二は全裸で分娩椅子に縛り付けられ、絵里も全裸でテ-

ブルの上に、大の字の姿で縛り付けられていた。

「二人とも起きているようだね？」

「俺達をどうするつもりだ？」

「そうだね。道はふたつあるよ。浩二はアタイの手下として働くか、鬻り殺しの目にあうかね。

絵里は旨そうな身体しているから、捌いて肉にするよ」

アリサは浩二の萎びた男根を手で摩り始めた。

「何それ！アタイを肉にするってどういうことよ！殺すっていうの！」

それまで黙って二人の会話を聞いていた絵里が声を張り上げた。

「アタイはね。軽薄な女が大嫌いなんだよ。お前

は可愛い顔しているから少しの間、生かしておいてあげたんだ。それに余興の楽しみもあるしね」

アリサは腰を屈めるようにして勃起した男根を呑み込み、口腔性交を始めた。

「何が望みなんだ？」

浩二が上擦った声で尋ねた。

「お前達、香奈を浚って犯したんだってね。全部聞いているよ。他にも悪いことを色々とやっているんだろう？ いったい、何人の女を犯り殺したんだい？」

アリサは、男根を吐き出して、強く握りしめた。

「……」

「凶星だね？ お前達もアタイと同じ相当な悪だ

ね」

「そうよ。アタイだって、この手で何人もの女を絞め殺したよ……」

絵里が縫りつくような眼でアリサを見詰めた。

「だから殺さないでくれってかい？いいかい。この家の決まりを教えてあげるね。この家でボスはアタイひとりなんだ。浩二にその気があるなら、アタイの手下にしてやるよ。最高の女が抱き放題なんだよ。ここに隠れていりゃあ、察の心配もないんだ。それ以外の女達はすべてアタイの性交奴隷兼食料さ。わかったかい？」

アリサは浩二から離れ、絵里の前に立った。

「食料って何なのさ？」

「食料は食料だよ。若い女の肉は最高に美味しいんだよ。お前もすぐに肉にしてあげるよ。香奈の尻肉は最高に美味かったね。思い出しただけで涎が出るよ」

アリサは絵里の盛り上がった白い乳房を鷲掴みにし、臍に指先を挿入してかき回した。

「条件は何だ？」

「アタイの命令には絶対服従すること。できるか

い？」

「わかった」

「わかりましたでしょう！」

アリサが浩二の顔を睨みつけた。

「わ……わかりました」

「やればできるじゃない。じゃあ。初仕事をあげるね。こいつで絵里の手足を切り落として、腹も裂いて内臓を取り出すんだ。これまで大勢の女達を殺してきたんだろう？」

アリサは壁に添え木で固定していた刃渡り三十センチの大鉈を取り、浩二に見せ付けた。

「絵里を俺が殺すんですか？」

浩二はごくりと生唾を呑み込んだ。

「そうだよ。アタイはお前の忠誠心を確かめたいんだ」

「……」

「どうしたんだい？アタイの手下になるといのは、口から出まかせだったのかい？」

アリサは冷たい笑みを浮かべて、大鉦を浩二の頭上に振り上げた。

「待って下さい。殺ります。あいつとはただ、つるんでいただけなんです」

「浩二！テメエ！裏切り者！」

「最初から、素直にすりゃあいいのさ」

アリサは、浩二を拘束していた手足の紐を解いた。アリサは浩二に大鉦を手渡した。

「そいつでアタイを殺したいんだろう？」

「とんでもありません。俺は姉御の手下になったんです」

浩二にはアリサを殺す自信が無かった。

「姉御っていったのかい。お前は可愛い男だよ。」

後で、お前のマラを吸ってやるからね。早く済ましておしまい」

「止めろ！ぶっ殺してやるぞ！」

絵里が声を限りに絶叫した。浩二は絵里が縛り付けられているテーブルの上に立ち、大鉦を振り上げた。浩二は振り向きアリサの顔をじっと見詰めた。

「手足から切断するんだよ。首は最後にするんだ」
浩二が大きく頷いた。振り返り、大鉦を振り下ろした。

「ギャー！」

絵里の腕が根元から切断され、断末魔にも似た絶叫が響き渡った。鮮血が吹き出し、浩二の顔を

赤く染めた。続いて残る片腕も一撃で切断された。白目を剥き、全身を震わせる絵里の太腿に切りつけた。大腿骨を一撃で切断することはできなかつた。何度も大鉈を叩き付けた。その度に血肉が飛び散り、浩二の全身を赤く染め上げた。

第三章 地獄のハーレムへと続く